小説名作全集 25

夕焼け富士

大佛次郎

同光社

時代小說名作全集 25 夕燒け富士 ¥270

昭和29年6月20日發行

著者 大佛次郎
發行者 長坂定近
印刷所 株式會社・常磐印刷所
製本所 有限會社 關川製本所

發行所 東京都千代田區神田錦町3—14 株式會社 同光社

目

次

朧ろ夜……三
屋根の上の子供……一三
折れた蠟燭……二四
夜の會見……三五
父と娘……四六
青葉屋敷……五八
目に見えぬ敵……七八
山の湯……八九
稻妻の町……一〇〇
水の上……一三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

釜中の魚……一六五
壁の蠅……一七六
霧の座敷……一九四
裏切者……二二五
夜の鴉……二三六
あの人……二四六
近所同志……二八六
椿の寺……三一〇
富士は晴……三二四

夕焼け富士

朧ろ夜

市ヶ谷に屋敷のある早乙女伊織と云ふ旗本だつた。桐畑にゐる朋友の病氣を見舞ひに行つて、朧ろ月の晩の濠端を供の者を一人連れて歸つて來ると、片側の土塀の陰に誰れか人が立つてゐるやうだつたので、それとなく注意しながら通りぬけたのだが、伊織たちを見て視線を避けようとした樣子も面妖しければ、明らかに武士だつたやうに見えたので、何者だらうと疑ひを抱いた。

「もう四つを廻つてゐたな?」

「へえ」

と供の中間は答へた。

淋しい道に人通りはないのである。

變にその人間のことが氣になつた。道を折れて自分の屋敷へ出る坂道へ入りかけたが、まさかと思ふが辻斬ではないかと考へて、

「喜七。お前、ひと足先に歸つてゐろ」

と命令した。

供の者は、主人が急に妙なことを云ひ出したと感じたやうだつたが、五十にもなる伊織の氣性を知つてゐたので、云ひなりになりながら、提灯だけを殘して行かうとすると、

「いや、月がいゝから、も少し歩いて見るのだ。佳い句でも出來るかも知れぬ」
かう言ひ捨てゝ、伊織は道を戻つて行つた。
土塀の下に、その男はまだゐた。月明りで見えたのは浪人者らしい風采である。
伊織は、咎めるだけの決心もなかつたのだが、先方が伊織を見て顔を背向けたので、いよ〳〵怪しく思つて、立ち止ると、殊更に顔を見さだめようとして、
「何か捜してをられるのか？」
と聲をかけた。
振向いた顔は、若かつたし、朧ろ月の影につゝまれて、際立つて美しいものに見えた。
「お構ひくださるな。怪しいものでは御座いませぬ。人を待つてをります」
「それは……」
と伊織は、そのまゝ立ち去るより他はなかつたが、何となく、まだ變だなと思ふ心持は變らず、道を戻つて來たが、闇の中に立ち止つて暫く若者の姿を見詰めてゐた。
すると、向うではそれに氣がついたのだらうか。急に自分の方から近寄つて來て、おだやかな調子だつたが、聞きやうに依つては、かなり無體だとも思はれることを云つた。
「どうぞ、お引取り願ひたい。手前の勝手で立つてゐることです」
五十に手がとゞいても、かなり氣の強い男として通つてゐる伊織は、これを聞くと、ひき退れないやうに感じて、につこりとした。
「手前がこゝに立つてゐることも、御同樣、勝手なのだ。お構ひ下さるな」
瞬間に、若者の切長の目が、きつとしたやうだつた。しかし、言葉はどこまでも靜かに、

「無論のことです」
答へてから、
「しかし、そこにおいでられては、手前がひどく迷惑致すと申上げたら、お引取り下さるわけにまゐりませぬか」
伊織は冷静だつた。
「どう御迷惑をなさるのか」
「それを申上げられゝばよいのだが、仔細あつて、それが出來ませぬ。武士の情としてお願ひ申すより他はありません。如何でせうか？」
若者の態度は禮を守つてゐるが、どことなく激しいものが潜んでゐる。伊織が、いよ〳〵奇怪と感じたところである。それと、若者の威丈高に見えるのが去りにくゝしてゐるのである。
「武士の情と云はれるが、お手前が如何なる仁か知らぬことで、お言葉を一々もつともと伺つて置くわけにはまゐらぬやうだ」
「申上げたいが申上げられぬと云ふのです。後日お話する折もあるかも知れぬ」
漸く若者の聲には短氣の響があつた。伊織も何となくかつとして、
「では、強ひてと云はれるのか？」
すると若者は不敵な顏付で頷いて見せるのだ。物も云はず伊織の顏を見詰めてゐるのである。伊織も言切つた。
「勝手になさるがよい。こゝは天下の往來だ。私が立止つてゐようとゐまいと、何人にも斷りを云ふことはない」
伊織が動くまいとする氣色は明らかだつた。それを見ると若者は急に當惑の色を泛べて、
「やむを得ませぬ。御勝手に」
といつて立ち去らうとしたが、また思ひ返したやうに形を改めて、穩やかな聲で云つた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

「然らばかう云ふことはお願ひ出來ませぬか。それも不承知と仰せられるならば、手前の方が諦めて他日の機會を待つだけのことですが、御覽になつてゐられる分には御隨意として、手前の仕事に邪魔して頂きたくないと云ふことです」

「何をされるのか？」

と、伊織は思はず微笑を漏らした。若者の態度が單純で正直らしく見えるのに幾分か好意も動いて來たのである。

「話を聞くと、たゞ見てゐるだけならよいと云ふのか？」

「何が起らうと、誓つて手を出して頂きたくないと云ふことです」

「それには、お手前からも誓つて貰はねばならぬ。お手前のされることは、正しいことだと誓はれるか」

「誓ひます。たゞ多少手荒いかも知れませぬが……」

「承つた」

と伊織は、豪快な氣性をむき出しにして答へた。

「手荒いのには、私は驚かぬ」

朧ろ月は空にある。櫻の花はもう散つてゐたが、春の夜更の靜けさである。若者は故意に伊織がゐるのを無視してゐるやうである。その後は口もきかず、もとの土塀の下に立つて、市ヶ谷御門の方角に顏を向けたまゝでゐた。二三度、通行人の提灯が遠くに見えたが、誰れもこの道へは來ない。たゞ若者が伸び上るやうにして熱心に見詰めてゐるらしく見えただけである。

何を待つてゐるのだらう？

伊織は、今更、歸りたいにも歸れなくなつた我が身を苦笑しながら、物を言はなくなつた若者をそれとなく觀察してゐる。

（確かに悪い人間ではなささうだ。二十を少し出たぐらゐだらうが、てきぱきしてゐるのが氣持がいゝ。何故、もつと、くはしい話をしてくれないのだらうか。わけのわからぬものを待つてゐる俺れも妙な男だ！）

若者は、氣になるらしく、一二度伊織の方を見返つたが、最後に云つた。

「御老體、お引取り下さいませぬか。御覽になつて面白いものでもありませぬ。お風邪でも召してはなりませぬ」

「はゝはゝはゝ」

と伊織は、話掛けられて嬉しかつたのである。

「いや、まだ、老體と云はれる年齡でもないぞ。邪魔はせぬ。見て都合が悪いやうなことだつたら、さつさと逃げます。若い衆、あんたは一體幾歳になられる？」

「二十一歳です」

「二十一。それは私の伴と同年だ。ふうむ。しつかりしたものだな。父御は健勝か？」

その返事は、年を訊いた時のやうに、すぐにはなかつた。

「そのことはお答へ致しかねます」

「ひよつとして、誰れかの仇討ではないのか？　若しもそれなら遠慮なく云つて欲しいな、多少は役に立つかも知れぬ」

「その儀もお答へ致しかねます」

「私はすぐそこに屋敷のある早乙女伊織と申す者だ。柔弱な男と不正な奴は嫌ひだが、正しい者と豪膽な男ならば、いつでも味方するぞ」

びくつと若者は軀を動かした。低かつたが強い聲が聞えた。

「お靜かに」

その時、伊織にも、行く手から來る提灯が目に留つた。さてはと思つて見詰めてゐると、遠くて判らぬが駕籠らしく見えたのだ。若者はと見ると、塀から離れて熱心に見まもつてゐる。

駕籠は三四十間先まで來てゐる。駕籠脇に一人大きな男が附添つてゐる。若者は町角に身をひそめて、じつと見まもつてゐるのである。

間隔は狹くなつた。若者がまだ動かぬのは、確かに狙ふ敵と見たのではないか？　果して駕籠がその町角を左へ曲らうとすると、突然に、若者が黑い豹のやうに身輕く躍り出るのが見えた。月明りの中に白刃の閃くのが伊織の瞳に映つた。殆どそれと同時に、駕籠脇にゐた大男の侍が、苦もなく、棒のやうに地に倒れ、陸尺(ろくしやく)が、

「わつ！」

と喚いて、駕籠を投げ捨て、地面に轉げながら逃げ去つた。若者はそれを追ふこともなく早速に駕籠に飛びつき、垂れをはね上げたのである。

その刹那に、あつと若者が口走つたのが聞えた。

「女か！」

棒立ちとなつたのを見て、伊織も思はず伸び上つて、

「人違ひか？」

若者は、伊織の聲に耳も藉さず、駕籠の中に恐怖の目を瞠(みひら)いてゐる若い娘の顏を見詰めてゐたが、無意識の動作で、白刃を背に廻して隱しながら、

「稻田の娘か？」

と、詰問した。

十七八の美しい娘である。武士の娘としても氣丈だつた。怯えてはゐるが、狼狽へたところは見えず、若者の顏から目を離さず、問ひにも微かに頷いて見せたのである。

「卑怯者が、娘を身代りに寄越したのか！」

と若者は叫んだが、そのまゝ駕籠を捨てゝ、二足三足走いてから、伊織の方へにこりとした笑顏を見せたのを會釋に、そのまゝ立ち去らうとする樣子だつた。

「待つた」

と伊織が呼び止めたが、

「女に用はないのです。失禮しました」

早い脚である。見る間に遠ざかつて行くのである。

伊織はすぐに駕籠の側まで行つたが、醜く仰向きに倒れてゐる大男の侍が、刀の柵にも手を掛けてゐないのを見ると、皮肉な微笑を漏らして云つた。

「見事なものだ」

さて駕籠の內を覗くと、娘は今になつて氣が遠くなつてゐるらしかつた。そこへ突然に人の足音が驅寄つて來た。

「どこだ？　どこだ？」

これは五人ばかりの侍たちが坂の上から驅け降りて來たのである。駕籠の脇に伊織が立つてゐるのを見ると、急に腰の刀を拔いて身構へた者もある。じり〳〵と、肉薄して來るのである。

伊織は、體をひらいただけで冷然と、その樣子を見まもつてゐたが、

「もの〳〵しいな」
と、突然に太い聲を出して云つた。
「しかし、狼狽へて、人違ひをなさるなよ」
「なに！　人違ひ？」
「ふん、私はそこに屋敷のある早乙女伊織だが、お手前方はどこの御家中だね？」
外聞を考へたのだらう、先方は返事を躊躇つた。
「どこの御家中だね？」
と、伊織が、繰返したので、
「狼藉者は、どちらへまゐつた？」
「なアに、もう逃げたやうだ、素速い男だ。それにな、これは斬られたのではない。峰打だよ。よくも、そんな餘裕があつたと思ふくらゐ、あつと思ふ間の出來事だ」
伊織は、悶絶してゐた侍を無造作に引起してから輕く活を入れた。
「多愛のないものだな。どりや目が醒めたらう。その娘さんも氣を失つてゐるだけで怪我はない。さあ〳〵連れて行きなさい。さうか、陸尺が知らせたのか？　それは働き者だつたな。どこの御家中だね？」
根氣よく訊かれたので、先方も答へずにはゐられなかつたのだらう。
「そこの馬場家の家臣で御座るが、……」
「おゝ、馬場東慶殿の御家中か、それは〳〵」
その名を聞いて、確かに伊織が一層皮肉らしい口のきゝ方になつたのは、あまり好意を寄せてゐなかつたせゐだらう。

「して、念の爲に伺つて置くが、今の狼藉者に何かお心あたりはおありかな？」
じろりと刺すやうな眼だつた。
「何か意趣か、怨恨のあつての仕事のやうに取れたが……如何ぢや？」
「一向に存じませぬ」
と、一人がきびしく答へた脇から、別の者が口を出した。
「もとより、たゞの狼藉者で御座らう。いや、……お世話に成りました段には、いづれ改めてお屋敷へ御挨拶に伺ひます」
「いや」
と、高々と伊織は笑つた。
「禮などに來られる必要はない。私はたゞ何事が起つたのかと見てゐたまでぢや。あまり月がよかつたのでな。怪我がなかつたのは何よりだ」
馬場東慶の家來が急いで駕籠を圍んで立ち去るのまで、悠々と立つて見物してゐたのである。誰れもゐなくなり、自分ひとりに成つたのに氣がつくと初めて歩き出しながら、にたりと笑つた。
「馬場東慶ならば、いづれ何か人の恨みを買つたやうなことがあつたらう。それにしても稻田と云ふのはどこの誰れだ？　よし、歸つて早速、武鑑を見てやらう、いや、小氣味のいゝ若い者だつた！」
その若者が、十分と經たぬ前に、濠端の道を赤坂見付の方へ降りて來た。しかも、中間風の男が提灯をさげて供をしてゐたばかりでなく、どこで、着替へたのか若者の服裝も全然改つて、浪人者らしいところは殘つてゐなかつた。提灯の光で浮き上つた供の中間は、もう鬢の白い年寄だが、目鼻立が大きくて鋭どい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook